



ズーラシアで田中宗平獣医師のアドバイスを受けながら、ふ卵器に入れた卵の重さを測定するUWECの職員

この時、キーパーソンとなったのがズーラシアの飼育員、川口芳矢さん。07年から2年間、ズーラシアに籍を置きながら青年海外協力隊としてウガンダに赴任し、環境教育によりチンパンジーが住む森を守

る活動をした。川口さんを通じてUWECの存在を知った横浜市。ウガンダの現状を知り、自分たちができることがあれば、JICA横浜の草の根技術協力事業での協力が実現した。毎年、UWECの飼育員、獣医師、環境教育担当の職員が横浜市の3つの動物園（ズーラシア、野毛山動物園、金沢動物園）に研修で訪れる。さらに横浜市からも、現地に飼育員や獣医師を専門家として派遣し、子どもたちが体験しながら学べる環境教育の手法や、希少な野生動物の繁殖に役立つ技術を伝えているのだ。環境教育を担当するアイザック・ムジャージシさんは、「劇を取り入れながら子どもたちを巻き込む環境教育など、新たに学んだことがたくさんあります」と話す。



ウガンダでキリンの飼育や健康管理の方法を教える長倉さん

ズーラシアの来園者に、ベトナムなどに生息するサル的一种「アカアシドゥクラングール」を紹介する川口さん。今年、専門家として再びウガンダに派遣予定だ

に野生動物が生息する森や川があることも少なくない。しかし野生動物に対する正しい知識が浸透していないため、さまざまな問題が起こっている。例えば「ヘビには毒があるから退治しなくては」と思い込んでいる人が多い。しかし、実は毒を持つヘビの方が少ない。生態系を保つ上で重要な存在という点に気付かず、殺してしまうこともあるのだ。

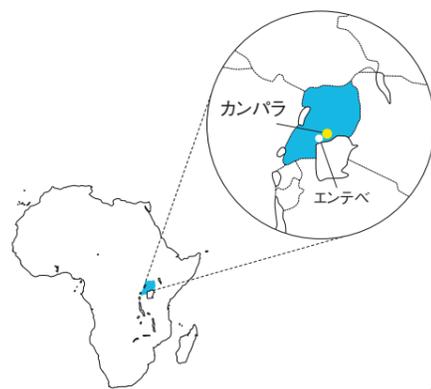
余地があった。また、希少な野生動物の繁殖にも取り組んでいないが、必要な技術や機材が足りないのも課題。そこで協力に乗り出したのが横浜市だ。2003年から、インドネシアで絶滅が危惧されている鳥、カンムリシロムクの保全のために協力を行ってきた横浜市。人工繁殖の技術や生息地の近くに住民を巻き込んだ保全活動などをサポートしてきた。その経験を生かし、08年からは新たなフィールドへ。それがウガンダだった。きっかけは「第4回アフリカ開発会議（TICA D IV）。開催地が横浜になったことを機に、アフリカとのきずなを深めたいという思いがあった。

「技術の向上はもちろんですが、一番の成果は意識の改革。ウガンダは縦割りの文化が強く、飼育員、獣医師、環境教育担当職員の連携が難しかった。しかし横浜市動物園での職員の働きぶりを見て、それぞれの強みを生かすためにも連携すべき」と思ってくれる人が増えたのです。横浜市が連携するパートナー、同市内の動物園の運営を担う公益財団法人横浜市緑の協会の長倉かすみさんはそう話す。

ウガンダへの支援は、日本にも多くの学びをもたらしている。協力隊終了後、ズーラシアに復職した川口さんは、「以前は動物の生態だけを来園者に説明していましたが、ウガンダでの経験を通して、野生動物を守るためには、その周りに暮らす人々のことも考えなくてはいけないと学びました」と話す。



「これはウガンダにいるナイロワニ。体長はなんと6メートルです！」
「えっ!? 大きい！」
「何を食べるの？」
横浜市郊外のよこはま動物園ズーラシア。平日の昼間でも、親子連れや近所の学校の子どもたちでにぎわっている。彼らにワニの写真を見せながら問いかけているのは、ウガンダ野生生物教育センター（UWEC）の職員たち。紙コップでワニを工作しながら、ワニの生態を学ぶ。わにわにワークショップでのひとコマだ。ウガンダの人々にとって、野生動物は身近な存在。家のすぐそば



金沢動物園での研修で、人工保育中のクロサイの飼育方法を学ぶ



友情の輪を広げる

ウガンダ
from UGANDA

動物園から世界を知る

自然環境の中に生きる野生動物を守りたい。青年海外協力隊員を通じてつながった横浜市とウガンダの動物園。環境保全に対する意識向上を目指し、共に取り組みを進めている。



ズーラシアで子どもを対象に「わにわにワークショップ」を開催。ウガンダのワニの生態について解説